

ダニエル書 - 第112番

イシュマエルの予言的象徴を解き明かす：射手から十四万四千人に印を押す者へ

Jeff Pippenger

2024-03-02

神はその少年と共におられ、彼は成長して荒れ野に住み、弓を射る者となった。創世記 21:20

イスマエルは弓の射手となったが、それは戦争の象徴であり、ローマに対して行われる裁きの執行の象徴でもある。

バビロンの地から逃れてきた者たちの声がある。彼らはシオンで、我らの神、主の復讐、主の神殿への報復を告げ知らせる。バビロンに向けて弓兵を呼び集めよ。弓を張る者はみな、その周囲に陣を敷け。ひとりも逃がすな。彼女の行いに従って彼女に報いよ。彼女がしてきたすべてに応じて、そのとおりに彼女にせよ。彼女が主に、イスラエルの聖なる方に対して高ぶったからである。エレミヤ書 50:28、29。

射手たちは、その行いに従ってバビロンに報いを与える。そしてその報いは、間もなく到来する日曜法の時、すなわち黙示録18章の第二の声とともに、バビロンに対する段階的な執行の裁きが始まるときに開始される。

そして、私は天から別の声を聞いた。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずからず、彼女の災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで積み重なり、神はその不義を覚えておられるからだ。彼女があなたがたにしたとおりに、彼女に報いよ。そのわざに応じて、彼女に倍に返せ。彼女が満たした杯には、彼女のために二倍を満たせ。彼女がどれほど自らを栄えさせ、贅沢に暮らしたか、その分だけ彼女に苦痛と悲しみを与えよ。彼女は心の中で『私は女王として座に就いている。やもめではない。悲しみを見ることはない』と言っているからである。」ヨハネの黙示録 18:4-7

イシュマエルとその母ハガルは、長子の権利を相続することを妨げられ、追放された。こうして、嫉妬はイスラムの予言的な動機となり、戦争は彼らの予言的な務めとなった。最初の言及は、サラがイシュマエルとその母に課した抑制を含んでおり、彼らの「抑制」は、神の言葉と歴史を通じてイスラムの主要な予言的特性となった。イシュマエルの子孫は野性的な人々で、その手はすべての人に敵対し、その野性はウマ科に属するアラビア野ロバによって表されている。ゆえに、第一の災いと第二の災いにおけるイスラムの戦争は、怒れる馬にまたがる戦士として表される。

イスラム教は後の雨のメッセージであり、三つのわざわいが三つの特定の予言のラインを表しているのは当然である。というのも、後の雨の方法論は「行に行を重ねる」だからである。最初の二つのラインの予言的特質が結び合わされると、第三のわざわいのラインが確立される。これら三つの予言のラインは、十四万四千人が封印される期間を示している。これら三つのラインは後の雨が注がれる期間を表しており、第三のわざわいが2001年9月11日に到来したとき、後の雨は降り始めたからである。

後の雨は神の民の上に降り注ぐ。力ある天使が天から下ってきて、全地はその栄光で照らされる。『Review and Herald』1891年4月21日。

封印の期間は、1840年8月11日に始まり、1844年10月22日に第三の天使が到来して終わる期間によっても表されていた。その期間はハバクク書第2章にも表されていた。ミラー派の歴史はハバクク書第2章を成就し、その際、1840年8月11日に天使が降臨したときに始まり、1844年10月22日に第三の天使が到来したときに終わった。

ハバクク書第2章は、幻の終わりにその幻が『語る』と述べている。ヨハネの黙示録第10章3節では、御使いが大声で叫び（語り）、1844年10月22日には、同じ御使いが『時はもはやない』と誓い（語った）。ハバクク書第2章1節の見張り人は、見張り人たちがそのとき声を上げるゆえに、1840年8月11日に位置づけられる。

シスター・ホワイトが「その栄光をもって地を照らすはずであった黙示録18章の天使を表している」と見なした1888年の反逆において、見張り人（ジョーンズとワグナー）は、神の民にその背きを示すために、ラッパのように自分たちの「声」を上げた。なぜなら彼らのメッセージはラオデキアへのメッセージであったからである。1888年の歴史によって予表されていた2001年9月11日に、主は終末の民をエレミヤの「古き道」へと連れ戻されたが、そこで見張り人の声に耳は傾けられなかった。その天使の降臨は、見張り人の預言的到來を示す印である。

1840年8月11日に到来した「声」は見張り人たちを通して伝えられ、失望ののちに信仰と神への信頼に立ち返るなら神の口となると、エレミヤに告げられた。1844年10月22日に遅れていた幻がついに到来したとき、それは「語った」。ミラー派の歴史の中で成就したハバクク書第2章の期間は、十四万四千人の封印の期間を示している。

1840年8月11日から1844年10月22日までが、十四万四千人の封印を示しており、それは「後の雨」が注がれる時期であることを認識することが不可欠である。また、「後の雨」のメッセージが“line upon line”という方法論によって識別されるべきであることも不可欠である。十四万四千人の封印という特別な期間は、預言的なラインにおいて繰り返し表されており、ハバクク書二章でも同様である。そこは、ホワイト夫人がミラー派の歴史の中で成就したと直接指摘している箇所である。さらに彼女は、ミラー派の歴史が十四万四千人の歴史の中で繰り返されると繰り返し教えている。

彼らが再臨の時に当てはまると見なしていた預言とともに織り込まれていたのは、彼らの不確かさと不安の状態に特別に適合した教えであり、今は彼らの理解には暗い事柄も、やがて時が来れば明らかにされると信じて忍耐強く待つよう彼らを励ますものであった。

これらの預言の中には、ハバクク書2章1～4節のものもあった。「私は自分の見張り所に立ち、物見台に身を置き、主が私に何を語られるか、また私が戒められるとき何と答えるべきかを見ようと見張ってしよう。すると主は私に答え、言われた。『幻を書き記し、書板の上にはっきりと記せ。読む者が走りながらでも読めるように。というのは、この幻はなお定められた時のためのもので、終わりには語り出し、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れはしない。見よ、高ぶる者の魂は彼の内に正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。』」

早くも1842年には、「幻を書き記し、これを板の上にはっきり書いて、読む者が走りながらでも読めるようにせよ」というこの預言の指示が、チャールズ・フィッチに、ダニエル書とヨハネの黙示録の幻を説明するための預言図表を作成することを思い立たせていた。この図表の刊行は、ハバククに与えられた命令の成就と見なされた。しかしその当時は、同じ預言の中に、幻の成就に見かけの遅れ-待機の時-が示されていることに、だれも気づかなかった。失望の後には、この聖句が非常に意味深いものに思われた。「この幻はなお定めの際のことであり、終わりには語り、偽りを言わない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。…義人はその信仰によって生きる。」

エゼキエルの預言の一部もまた、信者たちにとって力と慰めの源となった。『主の言葉が私に臨み、こう言った。「人の子よ、イスラエルの地であなたがたが言っている『日は延ばされ、すべての幻は成就しない』というそのことわざは何か。だから彼らに言え、『主なる神はこう言われる。．．．日は近づき、すべての幻の成就も．．．わたしは語る。わたしが語る言葉は成就し、もはや延ばされることはない。』』『イスラエルの家の者たちは言う、「彼の見る幻は多くの日の後のためであり、彼は遠い時について預言している。」それゆえ彼らに言え、「主なる神はこう言われる。わたしの言葉はもはや一つとして引き延ばされることはない。だが、わたしが語った言葉は行われる。」』エゼキエル書12章21-25節、27、28節。The Great Controversy, 391-393.

ミラー派の人々は、十人のおとめのたとえやハバクク書2章を自分たちが成就していると見るだけでなく、彼らがこれらの預言を成就しつつあったその歴史こそが、エゼキエルが「すべての幻の成就」が果たされるべきまさに同じ歴史として指し示したのものである、と理解するよう導かれた。十四万四千人の封印を表す歴史の流れこそが、すべての幻の成就が果たされる場所である！

後の雨の時期と十四万四千人への封印を表す線は、預言史が例外なくアルファとオメガの印を有していることを立証するために結び合わされる。

ミラー派の歴史はヨハネの黙示録10章の天使の声で始まり、同じ声で終わる。2001年9月11日はヨハネの黙示録18章の第一の声で始まり、同章の第二の声で終わる。ハバクク書2章は見張り人たちの声で始まり、エレミヤ書の見張り人の声で終わる。第一の災いはムハンマドで始まり、ムハンマド2世で終わる。第二の災いはイスラムの四人の天使が解き放たれることから始まり、イスラムの抑制で終わる。

後の雨である方法論は、イザヤの「行に行を重ねる」という方法論であり、後の雨のメッセージを特定し確立するために結び合わされるその行は、必ずアルファとオメガの署名を含んでいる。黙示録第九章の第一のわざわいは、ムハンマドに始まり、ムハンマド2世で終わる。その期間は二種類の戦争に分かれており、最初はアブバカルの時に本格化したローマへの無秩序な攻撃であり、その後の百五十年は、イスラムにおける最初の組織的戦争が行われた時期であった。

百五十年は「五か月」という時の預言によって示されている。第二の災いにも、三百九十一年と十五日という時の預言がある。ゆえに、第一と第二の災いの預言的構造が始まりと

終わりを対応させているため、そこには封印と特定の期間とのあいだに区切りが設けられている。封印の過程は第一の災いの歴史の初めに示され、また第二の災いの終わりにも示されている。

第一の災いにおいて、第4節の封印ののちに続くのは「五か月」（百五十年）である。この「五か月」は二度言及されており、一度は第5節に、もう一度は第10節に見られる。第二の災いにおいて、1840年8月11日から1844年10月22日までの封印の過程に先立つのは、第15節の「時、日、月、年」（三百九十一年と十五日）の預言である。こうして一連の流れの中で、第五と第六のラッパは封印の過程の例証をもって始まり、そして終わる。

二本の線を「線に線を重ねる」ように適用すると、その二本の線は、モハメド1世とモハメド2世によって印づけられた始まりと終わりを示す。「線に線を重ねる」ことで、各線が時に関する預言を有しているため、各線には二つの明確に区別された時期が特定される。第一の災いの歴史においては、イスラムはローマを「傷つける」ことになっており、第二の災いにおいては「殺す」ことになっていた。第一の災いは槍、剣、矢による戦争であり、第二の災いでは武器として火薬が導入された。

第10節 彼らはサソリのような尾を持ち、その尾には針があり、五か月の間、人々を害する力があつた。11節 彼らの上には王がいて、その王は底なしの淵の天使であり、ヘブライ語でその名はアバドン、ギリシア語ではアポリオンと呼ばれる。

これまで、キースは最初の五つのラッパの吹鳴についての例証を私たちに与えてくれた。だが、今や彼に別れを告げ、ここで導入された預言の新たな特徴、すなわち預言期間の適用へと進まなければならない。

彼らの力は、五か月のあいだ人間に害を加えることにあつた。-1. そこで疑問が生じる。彼らが五か月のあいだ害を加えるのは誰か。-疑いなく、その後に彼らが殺すことになる同じ人々である（15節参照）。「人間の三分之一」、すなわちローマ帝国の三分之一--そのギリシア系の部分である。

2. 彼らはいつその責め苦のわざを始めるのか。第11節がこの問いに答えている。

(1) 「彼らの上には王がいた。」ムハンマドの死から13世紀末近くまで、イスラム教徒は複数の指導者のもとでさまざまな派閥に分裂しており、全体を統べる統一的な世俗政権は存在しなかった。13世紀の末ごろ、オスマンが政府を樹立し、のちにオスマン政府、すなわちオスマン帝国として知られるようになった。この政権は拡大を続け、主要なイスラム教徒の諸部族のすべてに及ぶまでに広がり、彼らを一大君主国家へと統合した。

(2) 王の性質。「それは『底なしの淵の御使い』である。」天使とは使者、奉仕者を意味し、善であれ悪であれ用いられ、必ずしも霊的存在を指すとは限らない。「『底なしの淵の御使い』とは、その淵が開かれたときそこから出てきた宗教の最高の指導者のことである。」その宗教はイスラム教であり、その最高の指導者はスルタンである。「スルタン、またはグランド・セニョールとも呼ばれる者は、最高のカリフ、すなわち大祭司でもあり、その身において最高の霊的威厳と至上の世俗権威とを兼ね備えている。」-World As It Is, p. 361.

(3) 彼の名. ヘブライ語では「アバドン」、滅ぼす者;ギリシャ語では「アポリュオン」、絶滅させる者、または破壊する者. 二つの言語で異なる名を持っていることから、勢力の名称そのものではなく、その性格を表そうとしていることは明らかである. もしそうであるなら、両言語の表現において彼は破壊者である. オスマン政府の性格は、常にそのようなものであった.

しかし、オスマンがギリシャ帝国に最初の攻撃を加えたのはいつか. ギボン『衰退と没落』などによれば、「1299年7月27日にオスマンは初めてニコメディアの領内に入った」.

一部の著述家は、その期間はオスマン帝国の建国から始まるべきだという仮定に立って計算してきた. しかし、これは明らかな誤りである. というのも、彼らは自分たちの上に王を戴くだけでなく、人々を五か月間苦しめることになっていたからである. だが、その苦しみの期間が、苦しめる者たちによる最初の攻撃より前に始まることはありえない. その最初の攻撃は、前述のとおり、1299年7月27日であった.

この出発点に基づく以下の計算は、1838年にJ・リッチ著『キリストの再臨など』と題する著作の中で作成され、公表された.

「『そして彼らの力は、人々を五か月のあいだ害することであった.』ここまでが彼らに与えられた権限であり、絶え間ない略奪によって苦しめることではあっても、政治的に滅ぼすことではなかった. 『五か月』、一か月三十日として百五十日となる. そしてこれらの日は象徴的であるゆえに、百五十年を意味する. 1299年7月27日を起点とすれば、その百五十年は1449年に至る. その全期間を通して、トルコ人はギリシャ帝国とほとんど絶え間ない戦争を続けていたが、なおそれを征服するには至らなかった. 彼らはギリシャのいくつかの州を奪取して保持したが、それでもコンスタンティノープルにおいてはギリシャの独立が保たれていた. しかし1449年、すなわちその百五十年の終わりに変化が生じ、その歴史は次のラツパの項で見いだされるであろう。」
ユライア・スミス『ダニエルと黙示録』505-507.

ユライア・スミスは、ジョサイア・リッチによる150年の算定を引用しており、それが満了すると、次のラツパにおける391年と15日の預言の起点をなすとしている. これら二つの関連した時の預言に関するリッチの予告についてコメントして、シスター・ホワイトは次のように記した:

「1840年には、預言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ. その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を發表し、オスマン帝国の没落を予告した. 彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される. そのとき、コンスタンティノープルにおけるオスマンの権勢は打ち碎かれると見込まれる. そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう』.

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた. この出来事は預言を正確に成就した. それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた. 学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から

1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

第一の災いと第二の災いは、相互に関連する二つの時の預言によって結びつけられている。第一の災いは封印の例証から始まり、第二の災いは1840年8月11日から1844年10月22日の第七のラッパが鳴り響くまでの歴史で終わるが、これもまた封印の例証である。始まりと終わりはアルファとオメガの署名を帯びている。というのも、キリストが一週の間だけ契約を確かにされた歴史と同様に、その期間は二つに分けられているからである。第一の期間は第一のモハメッドに始まり、第二のモハメッドで終わる。第二の期間は「神の御前にある金の祭壇の四つの角からの声」に始まり、「永遠に生きておられ、天とそこの中にあるもの、地とそこの中にあるもの、海とそこの中にあるものを創造された方にかけて、『もはや時はない』と誓う」キリストの「声」で終わる。

次回の記事でこの研究を続けます。

「神の民が歩んできた過去の壮大な歴史について疑いを生じさせるためにサタンが人の心に呼び起こしうるいかなる問いも、サタンを喜ばせ、神に対する罪である。主が力と大いなる栄光をもってまもなくこの世に来られるという知らせは真理であり、1840年には、その告知を宣べ伝える多くの声が上がった。」『Manuscript Releases』第9巻、134頁。